題目　　協力におけるコミュニケーションと共有知識の効果：実験的検討

氏名　　豊嶋 由夏

指導教員　竹澤 正哲

人間社会において、コミュニケーションは大規模な協力を成り立たせるために重要な役割を果たしている。特に社会的ジレンマ状況において、集団内のコミュニケーションが相互協力を促す効果を持つことは過去多くの研究で指摘されている。コミュニケーションが協力に影響を与える認知メカニズムに関しては未だ解明されていない部分が多いが、最近の研究から、コミュニケーションの効果の一端に共有知識が関わっていることが示唆されている。共有知識とはある知識が集団内で共有されていることを集団の全員が認識しているという心理状態のことであり、共有知識が社会的ジレンマにおける協力行動を促進する可能性のあることが先行研究でわかっている。本研究では、コミュニケーションが協力を促進するのは参加者の「協力したい」という意図が共有知識となることで、他者の協力に対する期待が高まるためであると考え、社会的ジレンマゲームを用いて参加者の意図についての共有知識の効果を検討した。参加者が協力するかどうかの意図を宣言の形で表明し、その内容に関する集団内での共有知識の有無と、チャットを用いたコミュニケーションの有無によって協力率が変化するか検証した。その結果、参加者の意図や宣言に関する共有知識のみの条件では協力率が上昇せず、コミュニケーションが協力に与える効果を再現できないことがわかった。一方で、共有知識に加えてチャットによる対話を行った条件では協力率が上昇するという結果が得られた。また、参加者が行った意思表明の宣言内容の検討により、大多数の協力的な宣言よりも少数の非協力的な宣言が参加者の意思に強い影響を与えた可能性があることがわかった。これらの結果から、意図の共有知識は、それ単体では参加者の期待の上昇に寄与しにくいという可能性が示された。また、共有知識単体による効果の限界と、チャットによる自由なコミュニケーションの重要性が示唆された。意図の共有知識とコミュニケーションが参加者の期待に与えた影響の詳細については、今後さらなる研究が必要である。